

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会 (日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 118 年)



インド門

上：スモッグに煙るインド門

(2020年2月撮影)

左：ロックダウンのため空気がきれいになった時のインド門

(2020年5月撮影)



目次

- 1. 農村ジャーナリスト、パラグミ・サイナートさんと若い仲間たち……………P. 3
- 2. 私がお薦めするインド関連書籍 第三回……………P. 6
- 3. 新型コロナとPM2.5……………P. 9
- 4. インドニュース (2021年10月) ……………P.11
- 5. 新刊書紹介 ……………P.15
- 6. イベント紹介とお知らせ ……………P.16
- 7. 掲示板 ……………P.18

広告削除後、目次とページを合わせるために空白ページをいれております。

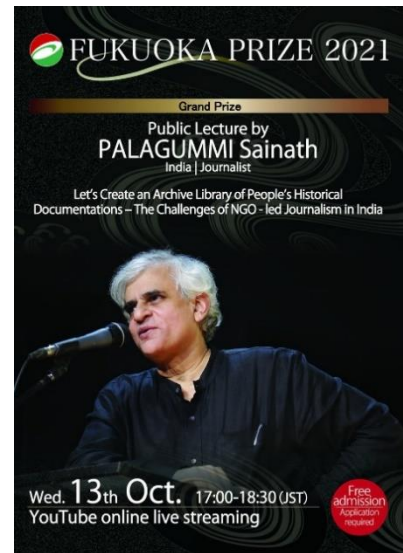
1. 農村ジャーナリスト、パラグミ・サイナートさんと若い仲間たち

Palagummi Sainath and his Fellows at People's Archive of Rural India (PARI)

立教大学教授 日印協会理事
竹中千春

インドのジャーナリスト、パラグミ・サイナート(Palagummi Sainath)さんに、2021年福岡アジア文化賞の大賞が贈られた。新型コロナ・ウィルス感染症の緊急事態宣言下ではあったが、2021年9月27日オンラインで授賞式が開かれ、サイナートさんはムンバイからZoomを使って出席され、秋篠宮殿下の祝福もいただいた。インドでは感染拡大の第二波がようやく後退した時期で、苦境の中で福岡市の人々からインドへの温かい励ましが届けられたことに、サイナートさんは深い感謝の念を表された。

サイナートさんと日本のご縁は深い。2003年には国際交流基金と国際文化会館の主催するアジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)のフェローとして2ヶ月間東京に滞在され、京都・大阪・広島を訪ねられた。2019年2月にはALFPの国際シンポジウム「アジアにおける分断と格差」では力強い基調講演を行われ、その後、2011年東日本大震災の被災地にも脚を伸ばした。以下では、草の根ジャーナリストとしての新境地を切り開いてきた彼とその仲間たちの仕事についてご紹介したい。



2021年10月13日市民講演会のポスター

農村ジャーナリズムの開拓

サイナートさんは、1957年マドラス(現在のチェンナイ)で生れた。アーンドラ・プラデーシュ州(こルーツを持つ家系を継ぎ、祖父のV・V・ギリ氏はマハートマ・ガンディーの率いる非暴力の市民不服従運動に身を投じた政治指導者で、独立後のインドで第4代大統領を務めた。マドラスの大学を卒業後、首都ニューデリーに新設されたジャワハルラール・ネルー大学院大学に進学し、古代史の大家ロミラ・ターバル教授に師事した。ターバル教授も傑出した歴史家として第8回福岡アジア文化賞学術研究賞を受賞されている。

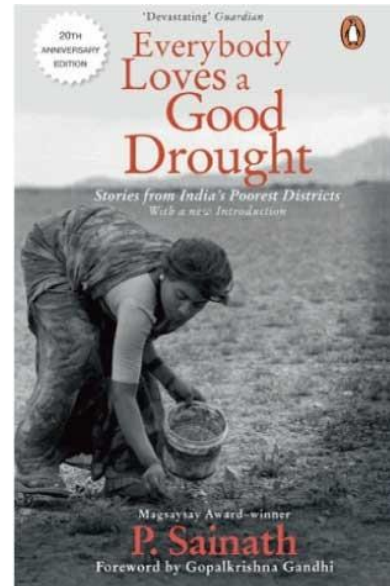
彼の大学院時代は、インド政治の激動期だった。1975-77年にはインド国民会議派インディラ・ガンディー首相の下での非常事態体制が敷かれ、議会や選挙が停止され、反対派が弾圧された。多くの学生は共産党系の学生団体に加わり、反政府運動を展開した。自由と民主主義を謳うジャナタ運動が広まり、民衆の支持を得た野党勢力が1977年総選挙に勝利し、反会議派のジャナタ連合政権を成立させた。卒業後、サイナートさんはジャーナリズムの道に進み、UNI通信社で勤務した後、政治雑誌『ブリッツ(BLITZ)』の副編集長を担った。

1990年代になると、会議派の影響力の後退と並行して、ヒンドゥー至上主義勢力が台頭した。1991年末にインド国民会議派のナラシマ・ラオ政権がインド型社会主義からグローバルな市場経済への転換を本格化した後、農村社会は大きな変動を被った。競争と利潤追求の時代となり、物価が上昇し、公的補助が削減された。一部には土地開発の波が押し寄せ、農村から多くの人々が都市に向かい、出稼ぎ労働者となった。この頃、サイナートさんはフリーランスのジャーナリストとなり、『タイムズ・オブ・インド』紙に「インドの貧困の顔」と題した企画を持ち込み、農村の人々についての記事を連載し始める。

短期間に執筆した84本の記事を集め、1996年に出版したのが『みんな干ばつが好き——インドの最貧困地帯からの物語』(Everybody Loves a Good Drought: Stories from India's Poorest Districts)である。不思議な書名だが、現代インドの農村に生きる人々の、シュールでありながらリアルな思考方法を示している。あるとき、村人が「今年は三つ目の収穫も順調だった」と嬉しそうに説明してくれた。サイナートさんには訳がわからない。よくよく話を聞いてみると、年に二回の収穫に加え、しっかりと干ばつに見舞われたので政府の補助金も十分に獲得したという意味だった。こうした驚きが記事となり、著書に結実している。

農民の一瞬の姿を捉えた写真と鋭くも温かい筆致の文章が、多くの読者の心をつかみ、本書はベストセラーとなった。この仕事によって、サイナートさんの名は国内外に広く知られるところとなり、1996年には優れたジャーナリストとして欧州委員会のロレンツォ・ナタリー・メディア賞を、2000年には国際NGOのアムネスティ・インターナショナルからグローバル人権ジャーナリズム賞と国連の食糧農業機構（FAO）のベルマ賞を受賞した。2007年にはアジアを代表する秀逸なジャーナリストに選ばれ、ラモン・マグサイサイ賞を受賞した。また、2004-2015年には『ザ・ヒンドゥー』紙の農村問題担当編集者となり、BRICSの一国となったインド各地の農村を取材し、発信し続けた。インド国民会議派のマンモハン・シン政権時代には、連邦や州の政府にも農村政策のアドバイザーとして協力した。

こうした輝かしい経歴にもかかわらず、彼の生き方はまったく変わらない。謙虚で正義感が強く、好奇心の旺盛な人だ。そして、村々を歩き、人々の話を聞き、丹念に情報を集め、現状を分析する。村人をカメラのレンズに捉え、人々の物語をより広い世界へと紡ぎ出す。大学で教鞭を執り、講演会でも熱心な話をする。他に代わる人のいない、独特のジャーナリストとしてのサイナートさんにはファンも多い。『彼の一族』(A Tribe of His Own: The Journalism of P. Sainath, 2002, directed by Joe Moulins)や『ネロの賓客』(Nero's Guest, 2009, directed by Deepa Bhatia)という、サイナートさんが主人公のドキュメンタリー映画も、国内外の監督らによって制作された。YouTubeなどでアクセスできれば、ぜひ鑑賞してほしい。



著書『みんな干ばつが好き』の表紙

農村インド民衆文書館 (PARI) の挑戦

ここで、サイナートさんが中心となって2014年に創設された、デジタル・ジャーナリズムのプラットフォーム「農村インド民衆文書館 (PARI)」について書いておきたい。そのホームページには、どのような団体かを次のように説明している。

生きる雑誌であり文書館、それがPARIだ。現在進行形の農村社会についての報道を生み出し、支えていく。同時に、可能なかぎり、これまでに出版された記事や報告書、録画や録音のデータベースを構築する。PARIの保持するすべてのコンテンツは、クリエイティブ・コモンズ (Creative Commons) とし、自由にアクセスできるオンライン上のサイトとする。そして、誰もがPARIに貢献できる。書いたもの、撮影したもの、録画・録音したもの——PARIのサイトの水準を満たし、「日常の民衆の日常の暮らし (the everyday lives of everyday people)」というテーマに沿うかぎり、どんな資料も受け入れていく。

かつてサイナートさんがPARIの構想を話すと、ほとんどの友人が「君は正気か？」と心配したという。資金をドブに捨て、大失敗するだろう、と。けれども、ドンキホーテのような決意をもって突き進んだサイナートさんは、ついにPARIを創設し、たくさんの新しい仲間を迎え、今や大きな成功を収めている。

かつての図書館や博物館に代わり、誰もが気軽にアクセスできるインターネット上の「生きる図書館や博物館」をつくる。数々の土着の言語が消滅し、固有の文化や伝統が失われ、人々の貴重な記憶や経験がどんどん忘れ去られていく。そうした時代に、PARIをプラットフォームに、こうした情報をデジタル化し、言語の壁を超えて発信し、共有の知的財産を作っていくのではないかと。そうした目標に向かって構築されたPARIのサイトでは、英語・ヒンディー語・ベンガル語・マラータ語・オディシャ語・ウルドゥー語という多言語のサービスを提供し、さらに多くの言語の資料を扱っている。

ぜひともPARIのサイトを開いてほしい。きれいで、印象的で、しかも使いやすいサイトにデザインされている。とくに鑑賞していただきたいのが、サイナートさんが1993～2003年に撮影した作品を集めた「見える仕事、見えない仕事——腰をかがめて働く一生 (Visible Work, Invisible Women – A lifetime bending)」というギャラリーのページである (<https://ruralindiaonline.org/en/articles/sainath-womens-work-exhibition/>)。アーンドラ・プラデーシュ州とオディシャ州の農村で、腰を曲げて働く女性たちの姿を扱う。これまでも国内外で写真展が開

かれ、70 万人以上の人々が足を運んだという。私自身も、サイナートさんが 2003 年に来日した際に国際文化会館や立教大学で作品展を開かれたとき、初めてこれらの写真を見て、強い印象を受けた。しかし、インターネット上での展示により、膨大な数の人々がアクセスできる。誰もが理解を進められるように、ビデオ・クリップの音声案内とともに、短くも思慮深い解説が付けられている。

この衝撃的な 1 枚は、熱い日差しの下、畑で一日中働き続ける女性が、腰をかがめたまま一瞬だけ休憩する姿を写している。以下のように説明されている。



2014 年 9 月スルグジャ、サイナートさん撮影、<https://ruralindiaonline.org>

手で行う苗付け・種まき・草取りは単なる重労働ではない。しかも、延々と長い時間、体を痛める姿勢で行う仕事である。インドの働く女性の 81% が、農民、労働者、森林労働者、小型家畜飼育者だが、農業関係の仕事には厳しいジェンダー分業がある。農地の耕起作業は男性が行うが、女性はそれ以外のほとんどの作業を行う。

だから、女性たちは腰や脚の痛みを抱え、皮膚炎や破傷風に苦しみ、しばしば早産や死産も免れない。メディアで刻々と報道されるインドの GDP——そうした数字からまったく読み取れない、農村と女性の暮らしの実態が、強烈なイメージをもって目の奥に焼き付く。

PARI の若い仲間たちとパンデミックとの戦い

「百年後の未来人は、今日のインドがクリケット選手とボリウッド・スターばかりの国だったと思うだろう——サイナートさんの好きなジョークだ。メディアはセレブリティについて微に入り細に入り報道する。けれども、人口の大半を成す貧しい人々や農村の暮らしは、ほとんど報道されない。年間を平均すれば、記事総量の 1 パーセントにも満たないという。私たちの世界観を形作る情報の世界そのものが、ひどく歪んでいるということだ。

サイナートさんは PARI に集う仲間たちとともに、この歪みを正そうと日々努力している。ジェンダーや言語や宗教やエスニシティやカーストやその他もろもろの垣根も超えて、若い人々が PARI の仕事に携わり、ジャーナリストとしての力を鍛え、取材の成果を写真やビデオや記事へと変えて、オンラインで発信する。ほっておけばブラックホールの中に消えていく人々の記憶や経験を、一緒に探り当て、文字に起こし、歴史的な記録に変えていく作業だ。村人に簡易カメラを渡し、自分の一日を撮影し、自らの物語を語っていくというプロジェクトもある。現在を記録する作業と並び、過去を発掘する作業も進められている。その目玉となっているプロジェクトが、若いころに独立運動に加わった高齢の人々のオーラル・ヒストリーのデータベース構築である。有名でも何でもない、ごくふつうの農民がかつて経験し、今も記憶している「史実」を、やがて他界されてしまう前に、若い世代の人々と協働で、「知」の共有財産に変えてもらう。これこそ、民衆文書館の仕事である。

2020—2021 年、NGO としての財政状況が悪化したにもかかわらず、パンデミック下での農村の事態を正確に捉えて広く伝えようと、PARI の人々は奮闘してきた。感染政策や医療の状況はどうか。農村でもワクチン接種は進んでいるか。仕事、家族の暮らし、学校教育はどうか。女性や子ども、高齢者や病気の人々はどうか。具体的にどのような問題が起こり、何が緊急に必要なのか。PARI が草の根社会から伝えるのは、主流メディアの伝

える情報とはずいぶん異なる状況である。まさに、こうした民衆の「知」が、グローバルな市民社会を育てていく土台となっていくのだろう。

暗いニュースの多い昨今だが、サイナートさんと PARI の人々は、農村の多くの人々と同じように、諦めることなく働き、今日も取材と報道の仕事が続けている。これまで以上に、未来に向かう勇気とありがたい力をインドの人々から分け与えられた思いである。

2. 私がお薦めするインド関連書籍 第三回

India Related Books JIA Officers Recommend

前号に引き続き、日印協会役員の「私がお薦めするインド関連書籍」「私の人生に影響を与えたインド関連書籍」のご紹介を掲載いたします。本選びのご参考になれば幸いです。

📖 **堀本武功（国際政治学者、岐阜女子大学客員教授、日印協会評議員）**

§ 『インパールの戦い ほんとうに「愚戦」だったのか』

著者：笠井亮平

出版社と発行年：文藝春秋(文春新書)；2021年7月 ISBN 978-4166613229

本書を手にとったとき、正直なところ驚いた。筆者が文春新書を刊行することを知っていたが、タイトル副題が、「ほんとうに「愚戦」だったのか」だったからである。この副題は、目立つ。英語で言えばアイ・キャッチングである。気になって、国立国会図書館の和書検索システムで「インパール」を検索した。すると、単行本や雑誌特集号が約300点近いが、従軍記、戦死記、飢餓からの生還など、インパール作戦を否定的に捉えた本題やサブタイトルが多いようだったが、愚戦だったのかとなると肯定的な響きがあるからだ。

序章では、本書の目的がインパール作戦ではなく、インパールの戦いを検討することにあると断ったうえで、その理由が日本側の視点だけでなく、日本軍と英印軍の対比、インド国民軍、インド北東部の諸部族などを取り上げたいためであると強調している。これらの側面を考えることで、新たな光を与えたいと述べている。

この目的に沿って章が構成され、これを見ると、ある程度まで本書のイメージが浮かび上がる。

- 第1章 ビルマをめぐる攻防
- 第2章 失われた機会—幻の「1942年インド北東部進攻作戦」
- 第3章 インドを防衛し、ビルマを奪還せよ—英印軍の周到な準備
- 第4章 チャンドラ・ボースの登場と光機関の情報活動
- 第5章 二人の将軍の「変心」—日・英双方の作戦計画
- 第6章 激突—日本軍、インド国民軍、英印軍の戦い
- 終章 「インパールの戦い」とは何だったのか

ご覧のように、全体の流れはとても明解である。関係国などの全体な動き、進攻作戦が1942年を想定していたこと—ここでは、日印協会の関わりにも言及—、ボースと日本側情報機関の動向、牟田口中将とスリム中将の計算、1944年3月～7月の戦闘の順に記述されている。

評者は牟田口には強い関心もあり、インパール関連の高木俊朗『抗命』などを読んだほか、生前に録音されたかれの国立国会図書館政治談話録音も聞いた。豪雨の中を3週間分の食料だけを携行した、約3万人の戦病死兵が出た。死因は飢餓であり、往路は「白骨街道」とも呼ばれた。かれは、暁のういで1966年に77歳で死去した。談話録音には、お詫びの言葉はなかった。日本で刊行される多くのインパール本が日本語資料に依拠しているのに対して、英国側資料・文献も渉猟され、バランスのとれたインパール論になっている。文章も平易で読みやす



い。

最後に「ほんとうに愚戦だったのか」という本書の設問に対する解答については、手品のタネ明かしを先に明かしてしまうようなので、控えたい。関係者の話によれば、本書は発売後、直ぐに 2 刷りになった模様である。新書で廉価（本体価格 950 円）のせいだけではなかろう。筆者は本書で 8 冊目を刊行した新進気鋭の書き手である。

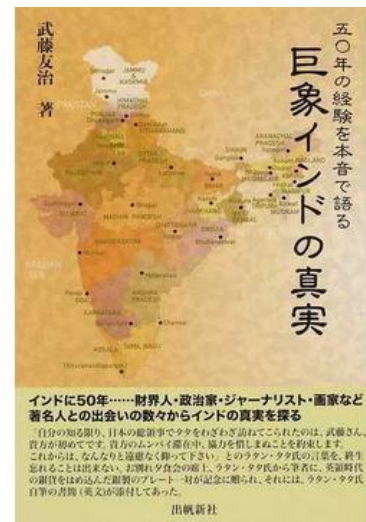
📖 原 佑二（日印協会理事 前日印協会業務執行理事・常務理事 元インド三菱商事社長）

📖 『巨象インドの真実』

著者：武藤友治 出版社と発行年：出帆新社；2017年 ISBN 978-4-86103-113-7

今年 5 月 90 歳でご逝去された元ムンバイ総領事 武藤友治(むとう・ともじ)氏が 2017 年に出された最後の著作です。

武藤氏は 1930 年、岐阜県生まれ。1953 年、大阪外国語大学インド語学科(現大阪大学)を卒業し、外務省に入省。ニューデリー(2 回)、ロンドン、コルカタ、ロスアンゼルス、ボストンの在外公館に勤務後、在ムンバイ日本総領事に就任されました。総領事として 3 年半ご活躍され、1993 年外務省を定年退職されました。ご退職後も幅広く現代インド研究と交流の深化に取り組み、マサチューセッツ工科大学国際研究センターの客員研究員、日印協会理事、さくら総合研究所、インド・ビジネス・センター、アクセルオーの顧問なども歴任されました。また幾多の大学や市民講座で、インド紹介講座、講演を行い まだまだ遠い国のインドを知ってもらう、理解してもらうために精力的な活動を続けられました。2011 年からはインドと縁の深い方々と インドに関わる様々な情報を交換、そして勉強の場として「インド・サロン」を立ち上げられインド探求の情熱を燃やし続けられました。



本書は氏の 70 年余の多方面でのインド交流体験をベースに氏のインドに対する想いと深い考察を記したエッセーです。故ネルー首相との出会いに始まるインドの政財界、ジャーナリスト、文化人、そして日印交流の架け橋として活躍された日本の方々との縁を記録した貴重な資料でもあります。

例えば、ネルー首相とは 1957 年にインドを初訪問した岸首相との会談で通訳として初めてお目にかかり言葉交わされた体験。ネルー首相の葬儀に派遣された大平特使(後の首相)と立ち会った最後のお別れ。チャンドラ・ボース氏の「撃墜死」調査で来日したインド調査団との関り、タタ財閥の総師ラタン・タタ会長との出会い等々。体験した本人でしかわからない、インドの政治家、官僚、経済人、メディア、文化人たちと関りの記録が著者のコメントと共に書かれ、その詳細な記録には圧倒されます。

武藤氏著作は、2003 年初刊の「インド私録」、「インド 宗教の垣塙」「巨象インドの憂鬱」等、全部で 10 冊近くあります。本書のまえがきに「インドに好奇心を煽られ続けて」、「最後まで終着駅の見えない鉄路を走る列車に身を任せ、インドという荒野を延々と突き走る思い…」と記された氏の生涯に亘る体験の数々、考察、そして氏のインドへの篤い「想い」を記された氏のエッセーの代表作です。武藤氏の語り口はどの著作もとてもソフトで堅苦しくなく読みやすく、落語が大好きであった氏のお人柄を思い起こします。

私が武藤氏と初めてお会いしたのは、2001 年デリー赴任に際し、当時八重洲にあった日印協会の事務所を訪れ、日印協会理事であった武藤氏の勉強会に参加した時でした。当時の駐日インド大使のアフターブ・セット氏から「赴任前は是非日印協会の歴史と活動を見て行きなさい」とアドバイスされたのがきっかけでした。

その後も様々な機会に多様で奥深いインドを教えてくださいましたが、自分がその後 日印協会事務局で 10 年近くもお手伝いし、理事をお引き受けすることになるとは夢にも思っていませんでした。武藤氏との出会いを振り返り、月刊インドの読者にも本書をぜひ読んでもらいたいとご紹介させて頂きました。

§ 『南インドの瞑想 ラマナマハリシとの対話』

訳編：おおえまさのり

出版社：大陸書房 ISBN 978-4803307481

私の人生にパラダイムシフトともいべき大変革をもたらしたのがこの本である。内容はというと非常に深遠であり、私ごとき一商人が説明をするにはとても難しく畏れさえ感じる。それは寄稿させて頂くのが、インド研究では権威と言われる先生方が会員に多く居られる日印協会発行の「月刊インド」だという事が一番の理由である。したがって、この度はこの本が主に私の人生に影響を与えた経緯と理由について述べさせて頂く事にして、専門的、学問的な言及はなるべく避けようと思う。

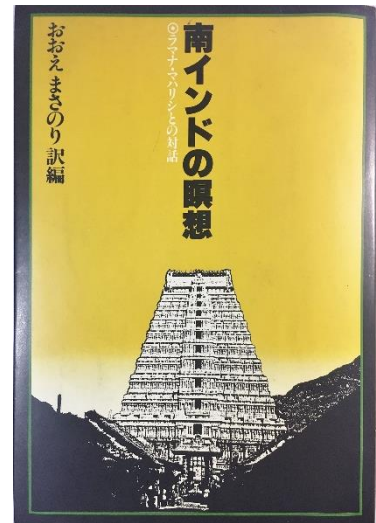
郷里熊本にいた頃の私は、浄土真宗を宗旨とする中学高校に通いながらもプロテスタントの教会や原始キリスト教のキャンプにも参加する、宗教おたく的傾向をもった学生だった。しかし、宗教組織に属して系統的に勉強する事には何か抵抗を感じ、躊躇するところがあった。

その後進学のために上京し、法政大学社会学部のちょうど2度目の3年生となる頃に、後に私のインド料理の修行の場となる印度料理アジャンタでアルバイトとして働きはじめた。当時の私は、留年したことや都会でのひとり暮らしの寂しさ、実家の家業の廃業など複合的な問題でかなり精神的に追い詰められていた。外目にも余ほど弱っていたのだろう、バイト先で先輩としてご指導いただいていた青森県出身の剣道3段の女性スタッフの方が、そんな私を見かねて道元禅についての書物を数冊、読んでみたらと貸して下さった。それが私の精神世界への入口となって座禅を始める事となった。インドに行くようになってからは、自然と座禅からインドの瞑想法に親しむようになり、今回ご紹介する本と出会うこととなったのである。

本書は、南インドはタミルナード州マドライに生まれ、ティルヴァンナマライのアルナチャラ山というヒンズー教の聖地で生涯を送り、多くの人々を安心と幸福へと導いた「ラマナマハリシ」という聖者の教えについて書かれた本である。最初はマハリシ（偉大なる知の聖者の意味）の生い立ちと出家から悟りに至るまでの経緯、そして後半は、多くのフォロワー（信奉者）が彼の下へ集り教えを聴き彼が亡くなるまでの経緯と、日々師の下で行われたダルシャン（接見）におけるフォロワー達の質問とそれに対するマハリシの答え及び指導を解説付きで紹介したものである。また、私などにとっては非常に難解と思えるアドヴァイタ（不二元論）を「私は誰か」という命題を投げかけてウパニシャドのアプローチで分かり易く解いている。

マハリシの下に教えを請う為、或いは共感し訪ねた人々の中には、「チベット死者の書」、「秘められたインド」の著者ポールプラントや、心理学者のユング他多くの西洋人もいた。また本書には記載がないが、インド人では「ヨガ行者の一生」で有名なパラマンサヨーガナンダなどの求道者もマハリシを訪ねアシュラムに滞在している。私は、この本を含めラマナマハリシに関する本を数冊読んだその後、居ても立っても居られない衝動にかられ、師のアシュラムを訪ね1週間滞在する事となった。それは今から30年ほど前1991年頃の事である。ご縁とは不思議なもので、私が料理の修行をさせて頂いた印度料理アジャンタのマルチー社長御兄弟がマハリシのフォロワーであった事から、当時マドラス（現チェンナイ）に住まわれていた社長の義姉のギータ・マルチーさんにアシュラムまで同行して頂く事になった。そして数人の日本人の友人も加わりアシュラム滞在を実現することが出来た。この時に、前述のユングに学生時代に同行してマハリシを訪ね、その後同地に永住して修行をつづけている求道者で、ギータ夫人の友人でもあるオランダ人のハムサデ・リーデ氏と出会う事が出来たのも幸運だった。彼とギータ夫人は本書に書かれているのと同じ内容の教えと瞑想法を、より実践的に我々に指導して下さった。それらは、間違いなくその後の私の人生の指標となった。そして、今も私の脳裏には、その時にラマナマシュラム（修行場）で共にプーシャ（礼拝）に参加し、聖地アルナチャラ山の周囲を皆でバジャン（讃美歌）を歌いながらプラダクシナム（聖地巡礼）した光景がありありと浮かんでくる。

そういう訳で、本書を「私の人生に影響を与えたインド関連書籍」としてご紹介したいと思う。



3. 新型コロナとPM2.5

From one distress Covid 19 to the other PM2.5

日印協会理事長 平林 博

インドは、一難去ってまた一難だ。

インドでは、最近新型コロナが収束に向かいつつあるが、毎年見られる大気汚染で苦境に陥っている。

ここ数週間、インドにおいては新型コロナ患者の発生数、死亡者数などが大きく減少傾向にある。

インドの感染者数は累計で 34,246,157 人だが、例えば本年 10 月 29 日の新規感染者は 14,348 人、累計の死亡者数は 457,191 人だが、10 月 29 日の新規死亡者は 805 人と急激に減少した。マハラシュトラ州とケララ州がいまだに新規感染で突出しているが、デリーでは 10 月 29 日には、新規感染者数 42 人、死亡者数は実にゼロとなった。

一時期インド特にデリーやムンバイなどの大都市では、感染者で病院があふれ、死者で火葬場が足りなくなり、あちこちに臨時的火葬場が作られた。各地にある常設の火葬場だけでは処理できなくなったのである。ヒンズー教では遺体は茶毘に付す習慣であるので、火葬場が必要なのである。野原や畑の一角を切り開き、あちこちから木を集めてきて火葬台を築き、その中に遺体を置いて火葬する。世界中がショックを受けたのは、インドのあちこちでにわか作りの火葬場で茶毘の日がいくつも燃えるドローン撮影の風景であった。

ヒンズー教の最高の聖地ベナレスのガンジス河河岸（ガート）やネパールの首都カトマンズ市内の火葬場で茶毘の火を間近に見てきた筆者も、にわか火葬場がいくつもできて同時にいくつもの遺体が燃やされる風景にはショックを受けた。

インド各地の病院やクリニックも、患者とその家族であふれ、収容されない患者たちが廊下はもとより戸外で待つ風景もショッキングであった。一時期、酸素吸入器が不足し、酸素ポンベの取り合い風景が展開された。わが国や米国などは、人工呼吸器や酸素濃縮器を空輸して供与した。病院は患者に対し酸素ポンベを持ち込まないと治療できないと通知したところもあり、酸素ポンベは取り合いとなった。

インドは世界最大のワクチン生産国であり、本年 1 月以降、近隣の途上国には無償で、そうでない国には有償でワクチンを輸出したが、インド国内の感染が激しくなるとワクチンの輸出を止めて国内対策に邁進した。その効果があったのだろう、感染状況が収まり始めた 10 月、ワクチン輸出を再開した。

全インドのワクチン接種率は、10 月 28 日には、ワクチン接種回数が 10 億回を突破した。同日で、1 回目 54.5%、2 回目 24.1% の接種率だが、13 億 2 千万人の人口からすると、絶対数はともかく人口比では先進国に比して少ない方だ。ワクチンや注射器の供給問題のみならず、医療関係者や病院の数、運搬・保存冷凍設備の制約、人々の低い衛生知識や意識など多くの制約があるからだ。

それでも感染状況が目に見えて改善してきたのはなぜなのだろうか？ ウイルス自体が変異の過程で弱体化したとの説もあるが、各地で自然に感染・治癒した人々が多いらしく、抗体保有率は 90% と極めて高い。いわゆる集団免疫が成立している可能性も取りざたされている。

いまだ油断はできないが、とりあえずはインド国民のために喜び、インド政府や医療関係者に対し敬意を表したい。

.....

他方、毎年冬にやってくるスモッグの被害が拡大中だ。

今月の本誌表紙には、デリーの象徴デリー門の 2 景を取り上げた。一つは新型コロナのためにロックダウン中のもので、空気は澄んでおり、人々の影はない。他方は、スモッグで煙る昨年某日のインド門であるが、最近のデリーはこのような灰色のスモッグで視界が不良である。デリーでスモッグを何度も経験した筆者の直感では、この写真のデリー門では PM2.5（大きさが 2.5 μm (1 μm は 1mm の千分の 1) 以下の小さな粒子) の質量濃度は、1 立方メートル当たり 300~400 μg はあるのではないか。

わが国の環境基本法では、1 日当たりの健康レベルは 1 立方メートル当たり 35 μg である。インドの新聞によると、最近デリーでは実に 999 μg を記録したそうである。

世界で最も汚染されている都市は、国際機関によると、第1位がデリー、第2位がダッカ、第3位がウランバートルだそうだ。

最大の問題は、人々の健康に及ぼす悪影響だ。特に、新型コロナの後遺症とスモッグが重なれば、ぜんそくなど基礎的疾患を持つ人々のみならずそうでない人々の健康も大きく損なうことになる。通勤通学などの人の移動は制約を受け、ただでさえ混雑する交通状況はさらに悪化する。わが国がODAで援助して完成したデリーメトロ（都市交通網）は大気汚染対策にも大きな貢献をしているが、デリーの大半の人々はバス、乗用車や二輪車、オート・リキシャといった排気ガスを出す交通手段に頼っている。気温の低い毎朝、インディラ・ガンディー国際空港などでは航空便の離発着は大幅な遅れを余儀なくされる。経済的な損失は計り知れない。

原因は、はっきりしている。

冬の天候と工場や発電所さらには自動車の排気ガスが第一だが、これらはほかの国でも主要な大気汚染原因である。デリーなど北インドは奄美大島ほどの緯度ではあるが、気温は摂氏5度以下にも低下する。気温の低下により水蒸気は水滴となって空気中を漂う。そこに排気ガスなどの汚染物質が混じるために、灰色の有害な空気となるのである。

原因の中でインド独特なのは、各地で行われるほし草の野焼き、さらにインド最大のヒンズー教の祭ディワリである。ディワリは、ヒンズー教歴のカルティカ月の新月の夜から5日間（世界的に使われているグレゴリー歴では年によるが10月から11月の5日間）行われる光の祭りである。春を呼ぶ祭り「ホーリー」と並ぶ庶民が楽しみに待ち、興奮する祭りである。

ホーリーでは、人々は誰構わず、いろいろな色彩の色水を盛大に掛け合うが、ディワリでは花火や爆竹である。ディワリの真価は、各家庭でローソクの火をいくつも焚き、女神ラクシュミを空から招いて祝福を受けるのである。ラクシュミは、ヒンズー教の三大神ヴィシュヌ神（ブラフマ神が創造した宇宙を維持し、それでも退廃する宇宙を破壊神シバにバトンタッチする神）の妃神がラクシュミである。わが国に導入されて吉祥天となった。

野焼きは、秋の収穫を終えた麦やコメなどの藁を次の収穫のために焼くのであるが、広大な畑のあちこちで炊くのでその煙は高く上がって風に乗るのである。デリーの場合は、周辺のデリー準州各地のほか西のパンジャブ州やハリアナ州からもやってくる。

野焼きは次の種まき・収穫のために必要であるが、花火や爆竹はそうではない。しかし、政府など当局がやるなどといっても多くの人々は従わない。権威に従わない、権威を疑うのは、インド人のインド人たるゆえんであるが、特に敬虔なヒンズー教徒にとっては、ディワリは毎年心待ちにする重要な宗教行事である。わが国や中国の正月、キリスト教国での大晦日（聖シルベスターの日）には人々は羽目を外すが、ヒンズー教徒にとっても宗教的な行事以上に楽しみな年中行事なのである。

大みそかには世界各地で花火が打ち上げられ人々がカウントダウンで歓声を上げる。筆者が在勤したパリでは、人々は行きかう人々とキスを交わしてお祝いし、きれいなイルミネーションが飾ったシャンゼリゼ大通りなどで大騒ぎをする。インド人を責めるわけにもいかないだろう。

しかし、ことは健康ひいては命にかかわる。排気ガス対策、野焼きのやり方の改善、ディワリを本来の静かな宗教行事に戻すなど、インド官民が協力して大気汚染に取り組んでももらいたいと願う。

2月ごろになって気温が上昇すると、燦燦たる太陽と共にスモッグは消えるが、それまでの間、インドの人々や在留外国人のために何とかならないかと気をもむ筆者である。



「デリーのアメリカ大使館が運営するアプリより」
PM2.5が1000を超えたといわれる瞬間

4. インドニュース (2021 年 10 月)

News from India

1. 内政

【連邦政府】

10月12日：内務省は、ベンガル地域北部のダージリン丘陵部、テライ、ドゥアールのグルカ族 (Gorkha) 代表者及び西ベンガル州政府との間で、西ベンガル州からの独立運動の解決に向け、グルカ族や同地に関する協議を行った。

10月中旬：北部ウッタラカンド州及び南部ケララ州で発生した豪雨による洪水・土砂崩れにより100名以上が死亡、多数が行方不明になった。

10月21日：国内におけるワクチン接種回数が10億回を超え、22日にはモディ首相がこれを記念して国民に向けた演説を行った。

10月27日：印国防省は、最大5,000km圏内の目標を攻撃する能力を有する地対地弾道ミサイルアグニ5 (Agni-5) の発射成功に係るプレスリリースを発表した。

【農業関連法】

10月3日：ウッタル・プラデシュ (UP) 州ラキンプル・ケリー県で、農業関連法への抗議デモ中の農民グループの列にBJP関係者を乗せた車が衝突し、4名のデモ参加者と1名のジャーナリストが死亡した。その後衝突した車が襲われ、2名のBJP活動家と1名の運転手が殺害されたほか、衝突した車は他の車両と共に燃やされた。

10月10日：現地メディアは、ラキンプル・ケリー県において、農業関連法に対する抗議デモを行っていた農民グループの列にBJP関係者を乗せた車が衝突し、多数の死傷者が生じた事案に関し、アジェイ・ミシュラ・テニー内務担当閣外大臣 (BJP) の息子アシーシュ・ミシュラが逮捕された旨報じた。

【ウッタル・プラデシュ (UP) 州】

10月20日：モディ首相立ち会いのもと釈迦入滅の地・クシナガル国際空港の開港式が行われ、日本、スリランカ、韓国、ベトナム、カンボジア、タイ、シンガポール、ブータンなどの代表者が開港式に出席した。

【ジャンム・カシミール (JK) 準州】

10月7日：現地メディアは、JK準州において、テロ関連の事件で多くの民間人が殺害されている旨報じた。報道によると10月5日までに殺害された民間人の数は22名に上り、同時期に殺害された治安部隊関係者数20名を上回った。

10月23日：現地メディアは、アミット・シャー内相が同日より3日間の日程でJK準州を訪問し、10名以上の民間人が死亡した最近の標的型テロ攻撃に関し、同地状況の確認を行うほか、地元政治家やBJP関係者との集会、各種開発プロジェクトの式典に出席する旨報じた。

【パンジャブ (PB) 州】

10月19日：現地メディアによると、PB州チャンニ州首相は、都市部における水道代の滞納金及び農村部における未納の水道代と電気代の支払いを免除する旨発表した。これに係る州政府の負担は180億ルピーとなる旨報じられている。また、農村部における水道使用料を70%値下げし、これまでの166ルピーから50ルピーとする旨発表している。

10月19日：現地メディアによると、シンPB州前首相は間もなく自身の政党を立ち上げると述べた旨報じられた。農業関連法の抗議活動解決と引き換えに、BJPとの協力関係を求めていると報道されている。

【ハリヤナ (HR) 州】

10月29日：現地メディアは、HR州グルグラム (旧、グルガオン) において、ムスリムの金曜礼拝を妨害したとして30名程が逮捕された旨報じた。逮捕された右翼団体関係者は、数週間にわたり礼拝を妨害していたと報じられている。

【ウッタラカンド (UK) 州】

10月30日：現地メディアは、アミット・シャー内相がUK州を訪問し、2022年に控える同州議会選挙に向けたBJPの選挙キャンペーンを開始した旨報じた。

【アッサム (AS) 州】

10月30日：現地メディアは、AS州警察がミゾラム (MZ) 州から同州に入域したMZ州警察を不法侵入の容疑で逮捕した旨報じた。

【グジャラート (GJ) 州】

10月3日：グジャラート州ガンディナガル市議会他3市議会等合計184議席を巡って行われた選挙でBJPが136議席を獲得した。就任後間もないパテルGJ州首相にとって最初の勝利選挙となった。モディ首相は「GJ州の人々とBJPのつながりを再確認するものとなった」とツイートした。

【マハーラーシュトラ (MH) 州】

10月5日：デュレイ、ナンドルバル、アコラ、ワシム、ナグプル、パルガルで行われた地方議会選挙では6県合計で、MH州連立政権与党のシブセナ、コングレス、NCPによる獲得議席数はBJPのそれを上回る結果となった。BJPは市議会選挙で単独で最多議席を獲得したが、前回選挙比ではマイナス9議席となった。

【西ベンガル (WB) 州】

10月3日：現地メディアは、西ベンガル州で行われた補欠選挙に出馬したママタ・バナジー西ベンガル州首相が、自身の選挙区で対立候補を破って同州議会議員の椅子を確保した旨報じた。

2. 経済

10月28日：現地メディアは、インド準備銀行のシャクティカンタ・ダス総裁が再任した旨報じた。任期は3年。

3. 外交

(印スリランカ関係)

10月2日：印外務省は、シュリングラ外務次官が2日から5日までスリランカを訪問した旨発表した。シュリングラ次官はラージャパクサ大統領、ピーリス外相、ラージャパクサ財務相を表敬した他、コロンバゲ外務次官と会談を行い、現行二国間プロジェクトの進展状況や新型コロナ関連問題をレビューした。

(印コロンビア関係)

10月3日：3日、印外務省は、コロンビアのラミレス副大統領兼外相が1日から3日までインドを訪問した旨発表した。ナイドゥ副大統領及びジャイシャンカル外相等と会談を行った他、科学技術省関係者とも面会した。

(印米関係)

10月7日：印外務省は、シャーマン米国国務副長官が、10月5日から7日まで、米印首脳会談及び日米豪印首脳会合の成果フォローアップのため訪印した旨発表した。シャーマン副長官は、ドヴァル国家安全保障顧問、ジャイシャンカル外相、シュリングラ外務次官等と面会した。

(印アフガニスタン関係)

10月7日：当地メディアは、バグチ外務報道官が、印アフガン間航空便再開の時期は未定であると述べた旨報じた。インド在住のアフガニスタン人へのビザの延長は内務省が既に行っていると述べた。

10月12日：印外務省は、モディ首相がアフガニスタンに関するG20首脳テレビ会議に参加した旨発表した。モディ首相は、インドは社会経済的な開発や若者や女性に対する開発の促進に過去20年にわたり貢献しており、500もの開発プロジェクトをアフガン国内で実施してきた旨述べた。また、過激主義の拡大を制限するには、女性やマイノリティーを内包した行政府の運営が必要であり、国連、G20を始めとする国際社会が一致して対応する必要があると述べた。

10月20日：印代表団がタリバーン幹部のハナフィー氏とモスクワで会談し、インドは人道支援を行う準備がある旨表明した。ロシアからの招待により、印外務省から参加した代表団がアフガニスタンに関する会合に参加し、サイドラインでタリバーン幹部と会談が行われた旨、タリバーン報道官が述べた。

(印中関係)

10月8日：現地メディアは、PLA（人民解放軍）兵士200名が前週、アルナチャル・プラデシュ州のタワン地区LAC（管理ライン又は実効支配線）近傍のブン・ラとヤンツェ間の国境道路において、無人壕を破壊するためにインド側に侵入し、印軍に一時拘束された旨報じた。

10月13日：現地メディアは、中国の税関が発表したデータによると、印中二国間貿易が9月末までに輸出入合計903億7,000万米ドルとなり、前年同期比49.3%の増加となった旨報じた。

10月27日：印外務省は、中国が23日に「陸地国境法」を新たに可決したことに関し、「中国が一方的に、国境管理や境界問題に関する既存の二国間の取り決めに影響を及ぼす可能性のある法律を制定することは、我々にとって懸念すべきことである」との報道官談話を発表した。

(印・中央アジア関係)

10月11日～13日：ジャイシャンカル外相は、インドの「拡大近隣諸国（extended neighborhood）」との関与の強化の一環として中央アジア3カ国（キルギス・カザフスタン・アルメニア）を訪問し、各国首脳と会談した。

(印英関係)

10月11日：印外務省は、モディ首相とジョンソン英首相が電話会談を行った旨発表した。両首脳は、今年初めに行われたオンライン首脳会談以来の二国間関係の進捗をレビューし、前回の会談で合意された2030年ロードマップへの進捗に満足を表明した。

10月22日～24日：トラス外相はインドを訪問し、ジャイシャンカル外相およびヤダヴ環境相と会談し、インド太平洋地域における安全保障および防衛面での協力強化や世界のグリーン成長を高めるための協力について協議したほか、貿易促進パートナーシップの達成に関する進展を歓迎した。

(印デンマーク関係)

10月12日：印外務省は、フレデリクセン首相が9日から11日にかけて国賓として訪印した旨発表した。コロナ禍後初の首脳による訪印となった。フレデリクセン首相は、コヴィンド大統領を表敬し、モディ首相と会談した後首脳共同声明を発出し、グリーン・セクターに加え保健等での協力強化や文化交流の拡大で合意した。

(印イスラエル関係)

10月17日～21日：ジャイシャンカル外相はイスラエルを訪問し、ベネット首相やラピード首相代理兼外相と会談したほか、同首相代理兼外相、アブダラーUAE外相およびブリンケン米國務長官とテレビ電話会談を行い、経済成長および国際情勢に関するより緊密な協力を議論した。

(印ASEAN関係)

10月27日：印外務省は、モディ首相がオンラインでEAS（東アジア首脳会議）に参加した旨発表した。ブルネイが主催し、ASEAN諸国のほか、オーストラリア、中国、日本、韓国、ロシア、米国及びインドが参加し

た。モディ首相はEASの重要性を再確認したほか、コロナ禍におけるワクチンや医薬品の提供などを通じた印の貢献について述べ、その他経済活動、自然環境保護、持続可能な生活様式のバランスをとれるような仕組み構築の重要性について強調した。

10月28日：印外務省は、モディ首相がオンラインで開催された第18回印ASEAN首脳会合に出席した旨を発表した。印ASEANパートナーシップ30周年の節目を強調しつつ、2022年を印ASEAN友好年とすることを発表した。また、共同声明「地域における平和、安定及び繁栄のためのAOIP（ASEAN Outlook on the Indo-Pacific, アセアン独自のインド太平洋構想）の協力に関するASEAN印共同声明」を发出した。

(G20)

10月29日～30日：モディ首相は、G20ローマ・サミット出席のため10月29日から31日までイタリア・ローマを訪問し、サイドラインでミシェル欧州理事会議長及びフォン・デア・ライエン欧州委員長、ドラギ伊首相、ローマ教皇、リーシングポール首相及びマクロン仏大統領、サンチェス西首相、メルケル独首相、ウイドド・インドネシア大統領とそれぞれ会談した。

4. 日印関係

10月4日～8日：経済産業省資源エネルギー庁が主催する「東京ビヨンド・ゼロ・ウィーク」が行われ、その中でインドを含む20か国のエネルギー担当大臣等が「第1回アジアグリーン成長パートナーシップ閣僚会合（AGGPM）」に参加し、アジアにおける現実的なエネルギートランジションの実現に向けた議論がなされた。

10月6日～8日：印海軍及び海上自衛隊との間で、海上自衛隊の戦術技量の向上及びインド海軍との連携の強化のため、第5回日印二国間海上訓練（India-Japan Maritime Bilateral Exercise）「JIMEX」が実施された。

10月12日～15日：印豪米海軍と日本の海上自衛隊は、ベンガル湾における多国間海上演習「マラバール2021・フェーズ2」を実施した。

10月8日：岸田総理は、就任後初めてモディ首相と日印電話首脳会談を行った。

今月の注目点①：日印電話首脳会談

10月8日、午後5時15分から約25分間、岸田文雄内閣総理大臣は、ナレンドラ・モディ・インド首相（H.E. Mr. Narendra Modi, Prime Minister of India）と電話会談を行ったところ、概要は以下のとおりです。

冒頭、岸田総理大臣から、就任直後の祝意ツイートに謝意を伝えた上で、モディ首相とは、外務大臣時代以来東京やデリーでお会いする機会があったが、こうしてまたお話でき嬉しく思う、モディ首相との信頼関係の下、基本的価値を共有する日印関係は近年大きく飛躍している旨述べた。これに対し、モディ首相から、岸田総理大臣の就任に改めて祝意が述べられ、両首脳は、両国関係を共に一層発展させ、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けて緊密に連携していくことで一致。

両首脳は、来年の日印国交樹立70周年も見据え、政治・安全保障、経済・経済協力、人的交流といった幅広い分野での協力を進め、「日印特別戦略的グローバル・パートナーシップ」をさらなる高みに引き上げていくことで一致。特に、首脳の年次往来の再開が極めて重要であること、日印外務・防衛閣僚会合（「2+2」）の早期開催に向けて調整を進めること、デジタル、グリーン、ヘルスケア、連結性強化、特定技能制度に基づく人材交流等で協力を進めること、日印の旗艦プロジェクトである高速鉄道事業を着実に推進していくこと等を確認した。

両首脳は、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向け、日印や日米豪印で緊密に連携していくことを確認した。その中で両首脳は、力による一方的な現状変更の試みや経済的威圧への強い反対の意を改めて共有するとともに、サプライチェーン強靱化等、経済安全保障の面でも協力を深めていくことを確認した。

岸田総理大臣から、北朝鮮による最近の核・ミサイル活動は、日本、地域、国際社会の平和と安全を脅かすものであると述べた上で、拉致問題について理解と支持を求めた。

この他、両首脳は、新型コロナ対策等の国際社会の課題での連携を進めていくことで一致した。

また、両首脳は、双方の都合のよい適切なタイミングでの岸田総理大臣の訪印を実現することでも一致した。

5. 新刊書紹介 Books Review

§ 『インドビジネス ラストワンマイル戦略 SDGs 実現は農村から』

著者：松本勝男

出版社：日本経済新聞出版

価格：2,700円＋税

ISBN 978-4532324278

近年インドを扱った書物は、その多くが政府の施策や産業振興などに視点を当てており、インドを理解するには有益ではある。一方、人々が日常直面する課題やそれに取組む企業の実態については、未だ情報が限られている。

本書のテーマは、ひと言で表現すれば、ビジネスと開発の融合であり、企業の斬新な取組みが農村の生活を変え、インド社会がダイナミックに変容している姿を活写している。人口の約7割、9億人が生活する農村の「ラストワンマイル」に視点を定め、創意工夫を通じて、様々な困難を乗り越える企業の活動を迫真性豊かに描いている。日本企業とSDGsの観点も含まれるなど、実に目の付け所がユニークであり、新しいタイプのインドについての著作と言える。

博士の学位もある著者がJICAインド事務所所長として滞在し、仕事をこなしながら書き溜め、わかりやすい文体ながら、データも豊富に濃い内容に仕上げた。先の8月に帰国されたばかりで、最前線にあってよくここまで具体的な事例を取り上げたものであると、感心する。節々にある「コラム」も興味をそそる。

インドビジネスを考えるうえで観点を変えてみるには秀逸本と思う。

(日印協会事務局長 西本達生)

- 第1章 社会イノベーション大国
- 第2章 インドの開発状況と「インパクト企業」の台頭
- 第3章 ラストマイルの奮闘
- 第4章 改めて知るインドの光景
- 第5章 SDGsビジネスの主流化



6. イベントとお知らせ Japan-India Events & Information

◇ 最近のイベント ◇

◆ インド古典舞踊 モヒニアッタム「宇宙を舞う花々 シヴァ神に捧ぐ」 丸橋広美氏の公演

11月7日、座・高円寺2にて開催。私だけでなく、他の観客にとっても久しぶりのリアル舞踊鑑賞だったのではないだろうか。

「インド大衆宗教画」をスクリーンに大きく表示させながら、演目の神話についてわかりやすい説明があり、その後、丸橋氏がその神話を踊るというプログラム。踊りは流れるように美しいが、モヒニアッタムはただ美しく踊るだけではなく、顔の感情表現も含めた舞踊芸術なのを確信した。

また、踊っている際にその神様にふさわしい花の日本画がスクリーンに映し出される。チラシよると花の絵の作者、渥美靖子氏は宇宙エネルギープレーナを描く方だ。

モヒニアッタムと絵画、音楽、舞台照明のコラボレーションで、夢の世界を作りだしていた。やはりリアルな舞踊公演の感激は違う。会場での観客の感動までも伝わってくるのを感じた。

神話の説明で使用されている「インド大衆宗教画」が石版画や木版画で作られた貴重なものと説明があった。その持ち主であった黒田豊氏が「福岡アジア美術館」に寄付をし、その展覧会も来年早々に開催されるそうだ。(日印協会 山本真里枝)



◇ 今後のイベント ◇

◆ 日印国交樹立 70 周年事業の政府認定について

2022年日本・南西アジア交流年に因む事業の認定を日本政府が行うというもので、南西アジア各国との交流を深めることを目的としており、そのうち日本とインドは国交樹立 70 年の周年にあたります。周年事業に認定された事業は、公式ロゴの使用を認められます。

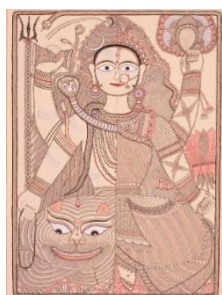


つきましては、下記の外務省ホームページに応募要領など詳細な案内が掲載されていますので、何らかの事業をお考えの方におかれましてはご参考にしていただきたく存じます。そして、周年事業を行うことにより、日本とインドの交流が盛り上がり、そのことを通じて相互の理解が一層深まることを望むばかりです。

詳細は下記外務省ホームページをご覧ください。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/s_sa/sw/page23_003584.html

◆ ミティラー美術館コレクション展」千葉新浦安で開催



インド独立 75 周年記念 日印国交樹立 70 周年記念として浦安市民プラザ Wave101 市民ギャラリーにて 2021 年 12 月 18 日～12 月 26 日まで当館コレクション展を開催します。

会期：2021 年 12 月 18 日～12 月 26 日

会場：浦安市民プラザ Wave101 市民ギャラリー

〒279-0012 千葉県浦安市入船 1 丁目 4-1 イオン新浦安店 4 階 (新浦安駅前)

開場時間：10 時～20 時 入場料：一般 500 円/中・高校生 300 円

主催：NPO 法人日印交流を盛り上げる会 応援：インド大使館

協賛：株式会社アンビカコーポレーション、ジャパンビジネスサービス有限公司

問い合わせ：NPO 法人日印交流を盛り上げる会 (新潟県十日町市西甲 265 Tel: 025-752-2396)

◆ キラン・ムルディア追悼展「インド 幻想風景」オンライン美術館 HASARD (アザー) で開催中

協会会員の宮本様にご投稿いただきました。

インドの現代画家のキラン・ムルディア(Kiran Murdia)さんが、本年5月8日に新型コロナにより他界されました。

この度、ご親族のご厚意により、私たちが運営しておりますオンライン美術館 HASARD (アザー) でのオンライン回顧展を開催することになりました。どなたでも無料でご覧になれます。ぜひ彼女が好きだったウダイプールの景色を彼女の色使いでご鑑賞ください。

キラン・ムルディアは、インド北西部ラジャスタン州ウダイプール出身の現代画家です。砂漠に浮かぶ湖の町ウダイプールの情景を独特のタッチと美しい色彩で表現した作品は国際的にも高く評価されました。インド国内でも数々の賞を受賞し、美術アカデミーのメンバーとして、若者の教育や芸術の発展に尽力した人物です。

私が初めて彼女の作品に触れたのは、もう何年も前のこと。ジャイプールでふらりと入ったアートギャラリーに展示されていた作品を見て、ラジャスタンの景色をこんな風に捉えられる柔軟な感性に、世界観が変わるような驚きを覚えました。

今年の初めに HASARD での個展開催の打診をしたところ、私たちのリクエストを大変喜ばれ、3月には開催が決定しました。その後、何度もやり取りをして準備を進めていた矢先、新型コロナウイルスに感染され、回復をお待ちしていたのですが、療養の甲斐なく、5月に旅立たれました。

しばらくは言葉もありませんでしたが、彼女の作品をぜひ日本の方にも見て頂きたいと考え、この度ご親族の承諾を得て、追悼展を開催させて頂く運びとなりました。準備を手伝ってくださった姪のヴァトサラ・ムルディアさんに心よりお礼申し上げる次第です。展示をご覧になったヴァトサラさんからは、叔母が生きていたらとても喜んでくれたと思う、と感謝の言葉を頂きました。

ウダイプールに行かれた方は、現地の風景を思い出しながら、まだ訪問されていない方は、想像を膨らませて、彼女の作品を楽しんで頂ければ幸いです。

(宮本洋子 個人会員)

【会期】2021年11月12日(金)～2022年2月15日(土)

【於】オンライン美術館 HASARD (アザー)

<https://wam-hasard.com>

*「オンライン美術館」でご検索ください。

【問い合わせ先】info@wam-hasard.com



作品の前に立つ
キラン・ムルディアさん

7. 掲示板 Notice

< 次回の『月刊インド』の発送日 > 次回12月号の発送は、2021年12月17日(金)を予定しております。

チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。また、インド関連イベントの後援も行っております。申請方法などお気軽にご連絡ください。

< 編集後記 >

11月1・2日のCOP26には130ヵ国もの首脳が集まり、岸田文雄総理もとんぼ返りで出席した。インドのモディ首相も出席して、「2070年排出実質ゼロ」を宣言するとともに、2030年までに排出原単位45%改善、総発電量の50%を再エネに、などを表明はしたが、問題はその実行性であり、後ろ向きに終始したことは否定できない。インドの宿痾ともいべき大気汚染の現状を憂い、平林理事長が叱咤激励を込めて書き溜めたエッセーを紹介するとともに、表紙には、昨年冬の冬の大気汚染に煙るインド門と、その年の4月に新型コロナウイルス感染症でデリーがロックダウンされた際、まるで別世界を見たと思奮していたインドの友人からの写真を比較のため並べて掲載した。現在この煙るインド門が復活したようだ。

メイン記事は、立教大学教授で日印協会理事の竹中千春先生に、2021年福岡アジア文化賞大賞のインド人ジャーナリストについて紹介いただいた。竹中先生は、同賞の審査委員でもある。インドの農村や女性の労働がなかなかスポットを浴びにくいのが、偶々新刊書コーナーで紹介した、JICAインド事務所前所長の著書もインドの農業に言及しており、月刊インドの多様性を示す好個のエッセーとなった気がする。

協会役員の皆さまから、シリーズで「私がお薦めするインド関連書籍」コーナーも三回目で、国際政治学者の堀本武功先生による笠井亮平氏のインパールの戦いについての論評と、原佑二、増田泰三各理事の紹介を以って一旦終了させていただく。次の企画としては、読者各位から薦めていただけないかと企図するところ。会員の皆さんにおかれては奮ってお寄せ願いたく、また表紙の写真についてもぜひご提供を。(編集人)

◇ 協会事務局からのお知らせ ◇

「インド・祭り」沖守弘写真集 会員無料配布について

「インド・祭り 神々とともに生きて5000年」沖守弘写真集をインド政府観光局のご厚意により、本を大事にいただける会員様に無料でお譲りする予定です。

悠久の大地彩る民族の祭り。ヒンドゥー教徒6億に息吹く古代文化の心。15年間撮り続けた写真6万枚から128枚精選不思議の国インドの23の祭りを世界に初公開。大型本、厚さ2.8cm、167ページ、写真は日本語と英語で説明されています。

どのくらいの希望者がいらっしゃるのかを11月中に会員へメールで確認する予定です。
メールの記載事項に従いお申込みください。

※ 沖守弘氏(1929-2018)は1977年から1996年の間に述べ70回以上インド各地を訪問して写真を撮り続けました。同氏は長年、日印協会会員として日印交流に尽力されました。

月刊インド 2021年11月号 (2021年11月19日発行) 発行人 平林博 編集人 西本達生
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <https://www.japan-india.com/>